田嶋智太郎のFXレポート☆彡　　２０２２年０３月１７日更新分

■　差し当たり、ドル強気の流れは一服！？

前回更新分の本欄で、ドル／円について「１月４日高値＝１１６．３５円を上抜ける可能性は十分あり、上抜けたらレンジを一段上にシフトさせる可能性もある」と述べた。それにしても、まさかこんなに早く１１９円台まで駆け上がるとは、正直、驚きとしか言いようがない。同時にクロス円も強含みで推移していることから、足元で強まっているのは紛れもなく「円安」であると言える。

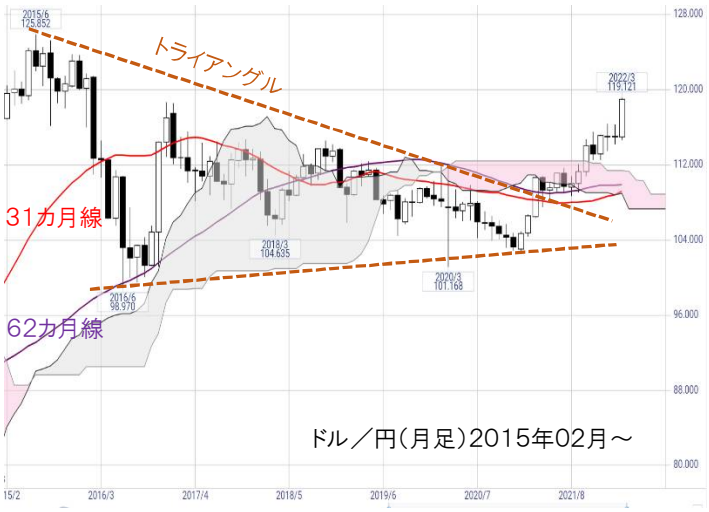
直接的な要因は、やはり原油先物価格の急騰ということになるのだろうが、ＷＴＩ原油先物価格（期近物）が直近高値＝１２９ドル台まで上昇したのは８日のことであり、以降は１００ドル割れの水準まで急低下していることも事実である。むろん、今後も高止まりの状態が続くことは想像に難くなく、たとえロシア・ウクライナ間の停戦協議が合意に至ったとしても、対ロシア制裁はそう簡単に解けやしないものと思われる。結果、日本の貿易赤字体質はしっかり定着し、足元では経常収支までもが赤字に転落する始末となっている。

思えば、２０２２年１月の経常収支が１兆１８８７億円の赤字になったことを財務省が発表したのは８日のことで、この日から円安傾向が一段と強まったことは間違いない。やはり２０１４年１月（１兆４５６１億円の赤字）に次いで過去２番目に大きい赤字となったことのインパクトは相応に大きかったと言えよう。

むろん、米連邦公開市場委員会（ＦＯＭＣ）が昨日（１６日）まで開かれていたことも大きい。先に米連邦準備理事会（ＦＲＢ）のパウエル議長が、今回のＦＯＭＣは０．２５％の利上げ実施が決議される可能性を示唆していたことで、市場の関心は「次回以降の利上げのペース・幅」に移っていたわけであるが、結果は市場の期待を裏切らず、想定以上にタカ派寄りであったとの受け止めになっているようである。

最も注目されたドットプロットは、２０２２年末の金利を中央値で約１．９％と予測しており、それは「年内残された６回すべてのＦＯＭＣで０．２５％の利上げが行われること」を示す。また、参加メンバーらによるインフレ予測も大幅に上方修正され、確かにタカ派寄りの印象ではある。

ただ、これらは事前の予想通りであって既に十分織り込まれてきたものでもある。これ以上はタカ派寄りにならないと思われることも事実で、目先のドル買い材料は一旦出尽くしになったとの感もある。つまり、肝心は「この先どこまで『円安』は続くのか」ということになるわけだが、下図の月足チャートを見てもドル／円はテクニカルに上抜けたとの感が強い。



足元で２０１６年１２月高値＝１１８．６７円を超えてきた以上、当座は「ついに１２０円台を試すか」が最大の焦点ということになろうが、正直、目先的には少々行き過ぎとの感触が強いことも事実ではある。

中国の景気対策期待によってユーロ／ドルが少し持ち直す可能性も考慮して、ドル／円が一旦は１１８円台前半あたりまで調整する可能性も一応想定しておきたい。

（０３月１７日　０９：３０）